氏　　名	：	土岐　玲奈
専攻分野の名称	：	博士（教育学）
学 位 記 番 号	：	博甲第 265 号
学位授与年月日	：	平成２８年３月１５日
学位授与の要件	：	学位規則第４条第１項該当　課程博士
学 位 論 文 名	：	通信制高校における生徒支援に関する学校臨床学的検討 －学習支援場面に焦点をあてて－
論文審査委員	：	（主査）　教授　保坂　亨 （副査）　教授　伏見　陽児　　教授　長澤　成次 教授　戸部　秀之　　教授　有元　典文

学 位 論 文 要 旨

本論文では、「学校へ行かない」という事がもたらすリスクが高まる現代社会において、困難を有する子ども・若者にとっての最後のセーフティネットとなっている通信制高校を主な研究対象とし、臨床的方法論に基づく研究を行った。

本論文は、全９章から成り、このうち本論は、２部構成となっている。

本論文において究明した課題は、高校(特に、単位制の定時制・通信制高校)における生徒の在籍状況及びその把握と、多様性が指摘される通信制高校の実態の整理(第Ⅰ部)及び、通信制高校における教育の実態と、生徒が抱える学習困難と支援のあり方(第Ⅱ部)であった。

序章では、本論文における検討の前提となる、高校教育の変遷と現状について検討し、高校生に対する学習支援に関する検討が不十分であることを指摘した。これを踏まえ、第１章では、本論文のリサーチクエスチョンを設定した。第２章では、教育現場に資する研究成果を目指し、多様な方法論を折衷的に用いる「臨床的」研究の方法論について整理した。

本論第Ⅰ部では、文部科学省及び東京都実施の統計調査の再分析によって、既存の調査・分析方法によっては、高校教育の「非連続」が把握できていないという現状が明らかになった。この結果を踏まえ、転編入による在籍生徒数の増加や、卒業に要する年数のばらつきがある単位制の定時制・通信制高校における生徒の複雑な在籍状況の推移とその把握方法の実態について、学校作成のデータを用いて明らかにした。最後に、通信制高校を、設定されている登校日数及び「登校」先によって、「従来型」、「集中型」、「ダブルスクール型」、「通学型」という４種類に分類した。

本論第Ⅱ部ではまず、公立通信制Ａ高校におけるアクションリサーチによって、生徒の学習プロセスや認知の特性と、心理状態や体調、生活背景等を併せて検討した。ここから、学習に対す

る肯定的な構えやモチベーションを獲得すると共に、学習達成の喜びや、対人関係上の安心感を醸成するための関係構築及び環境調整等を含む「学習のケア」の必要性を指摘した。また、セーフティネットとしての高校において、生徒集団の社会への移行を念頭に置いた指導が、一部の生徒の排除(退・転学)に繋がっている現状を踏まえ、対照的な、包摂も排除も強く志向しない場としての公立通信制高校の意義を指摘した。続いて、私立通信制 B 高校におけるアクションリサーチから、教員が生徒の指導を担う高校において、非教員が生徒との「斜めの関係」をベースとして行う支援の有効性を指摘した。

以上の結果を踏まえ、総合考察においては、通信制高校における教育のあり方及び、研究の進め方についての展望を述べた。本論で検討の対象とした公立通信制 A 高校では、生徒の支援に対するニーズを把握できないことが特に大きな問題となっていた。生徒が必要に応じて支援を要請できるようになるためには、支援要請を行う相手の適切な選定ができるだけでなく、対人関係上の安心感や信頼感、自己肯定感や、学習に対する意欲が必要となる。そのため、支援要請が難しい生徒に対しては、支援ニーズの有無を探り、生徒が抵抗感を抱かない形で関わりを持つといった配慮が特に重要となる。こうした、学習支援を行うための環境整備や生徒との関係作りも、公立通信制高校における「学習のケア」の一環であると考えられる。通信制高校における教育については、「高等学校学習指導要領解説　総則編」(文部科学省 2009)において、個別指導を重視すること、生徒の実態を把握し、自宅学習に必要な基礎的・基本的な学習知識について指導し、自宅学習への示唆を与えることが求められている。つまり、通信制高校の教員には学習のファシリテーターとしての役割が期待されている。しかし公立高校においては、教員の異動によって、通信制高校に適合的な教育方法の継承が困難になっている。

今後、公立通信制高校が抱える問題を解消するためには、まず、生徒への個別対応が可能な学校規模にすること、生徒が通いやすい、アクセスの良い場所に設置することが必要である。また、通信制高校が、学習制度や学校の様子等についての適切かつ積極的な情報提供を行うことによって、通信制高校の制度を知らずに入学してくる生徒とのミスマッチを防ぐこと、適切な支援を行える通学型の高校において、生徒を辞めさせない指導・支援を充実させることが望まれる。なお、本論文の課題としては、類似の研究が見当たらず、本論文における一連の研究で得られた知見の一般化可能性についての検討ができない点、公立通信制高校における成人の学習についての検討ができていない点が挙げられる。これらについては、今後検討を進めたい。